



学びの連続性の実現に向けた知的障害教科の検討

—国語科の目標・内容の整理・検討と実践を通して—

金沢大学附属特別支援学校 教諭 北 翔平



1 目的

文部科学省研究開発学校の指定を受け、小学校国語科の目標・内容に替えた教育課程を編成・実施している金沢大学附属特別支援学校の取組を通して、知的障害教科の検討を行い、国語科の目標・内容を一本化する可能性と課題を明らかにした。

2 方法

(1) 対象・期間

対象:小学部児童2名(特別支援学校学習指導要領国語科小学部2・3段階)、中学部生徒3名(同中学部1・2段階)、高等部生徒8名(同高等部1段階)

期間:2021年4月～2024年3月

(2) 内容

①小学校等との目標・内容の整合性の比較・分析

②言語能力に係る諸検査の実施

③〔中・高等部〕小学校の指導内容に替えた教育課程

の編成・実施・評価・改善の実施

3 結果

(1) 小学校等との目標・内容の整合性の比較・分析

	小学部	中学部	高等部
目標	小学校に類似	小学校・中学校に類似	中学校に類似
内容	小学校前の言語発達に沿って示されている	小学校1・2年程度	1段階:小学校3・4年 2段階:小学校5・6年
比較	小学校と特別支援学校を比較し、共通点と相違点をもとに以下の4パターンに整理できた。 小○ー特○、小○ー特△(一部一致、解説文中に同様の内容がある)、小○ー特×、小×ー特○		

(2) 言語能力に係る諸検査

小学部(LCスケール)	中学部(CARD)	高等部(CARD)
3歳前半	7～8歳程度	8～9歳程度
・同年齢の児童生徒と比べて認知や言語などに関わる全般的な知的機能の発達に遅れが認められた。 ・語彙力が低いことから、言葉の意味を正しく理解していない可能性がある。 ・【中・高】短文の内容理解は概ね9歳前後だが、長文は個別性が見られる。特に、関係性の理解と心情の理解との間に差がある生徒については、題材によっては学習グループや発問の工夫が必要である。 ・時間を多く設定するだけではなく、学習上の困難さを把握し、それに対する手立てを講じる必要がある。		

(3) 小学校の指導内容に替えた教育課程の実施(中・高等部)

	小学部	中学部	高等部
内容	小学部2・3段階	小学校1・2年	小学校3・4年
特徴	・「感性・情緒の側面」に重点を置いた。 ・絵本を「見る」、読み聞かせを「聞く」ことも「読むこと」と同等の価値があるものとした。	・「創造的・論理的思考の側面」に重点を置いた。 ・修学年限(3年)を通してすべての指導事項を取り上げた。 ・思考を焦点化するため、学習活動を細かく区切った。 ・学習過程に沿って評価規準を細分化し、評価を行った。	・「他者とのコミュニケーションの側面」に重点を置いた。
	・児童生徒の実態(発達段階、認知特性、興味・関心、習得状況や既習事項)をもとに、文章量や用いられている語句、挿絵・写真等を考慮し、教材とした。		

👉 学習上の困難さに対して指導上の意図(国語科の資質・能力)を踏まえて手立てを講じることで、「満足できる」状況を実現することができた。

4 考察 国語科の目標・内容を一本化する可能性・課題を以下のように整理した。

・本化に向けた整理が可能な事項:①国語科の内容(教科としての系統性・発展性に基づいた整理)

・知的障害教科として継承していく事項:

①児童生徒の発達段階・生活年齢に応じた対応、②知的障害による困難さとそれに対する指導上の工夫



学びの連続性の実現に向けた知的障害教科の検討(小学部)



ー小学部国語科「読むこと(文学的文章)」に重点をおいた指導と分析を通してー

金沢大学附属特別支援学校 教諭 宮崎 和志

金沢大学
KANAZAWA
UNIVERSITY

1 目的

知的障害のある児童が、語彙力を土台として情緒力・想像力を育てていくための指導計画及び指導方法を検討してきた。この取組を「小学校等の内容への接続」という視点から整理して、成果と課題を明らかにすることとした。

2 方法

(1) 対象・期間

対象	小学部児童
期間	2021年4月ー2024年3月

(2) 内容

- ①学習指導要領の比較・分析
- ②児童への検査実施
- ③小学校国語科を志向した指導計画・実践
- ④「学びの連続性」の視点からの実践整理

3 結果

(1) 学習指導要領の比較・分析

特別支援学校学習指導要領	小学校学習指導要領(第1・2学年)
・小学部1～3段階の指導事項は小学校第1・2学年の指導事項の前段階として概ね位置付く ・「読むこと」においては挿絵と結び付けて内容を理解したり想像したりすることが示されている ・小学校では示されていない独自の内容も示されていた(ex 小1～3段階 読むことウ)	・小学部3段階の指導事項と類似する指導事項が示されている部分もある ・「読むこと」においては文章を根拠として内容を理解したり想像したりすることが示されている

(2) 児童への検査実施

対象児童2名にLCスケールを実施した結果、両者とも3歳前後であった。

(3) 小学校国語科を志向した指導計画・実践



- ・单元前半では読み聞かせや劇遊びに取組んで、動作を再現する学習活動
- ・单元後半では絵本の挿絵と結び付けて想像する学習活動

体験的活動(語彙の獲得)

(ex 動作化・劇遊び)

情緒力・想像力の育成

(ex 絵本を基にした個別学習)

概ね満足できる状況を実現

(4) 「学びの連続性」の視点からの実践整理

劇遊びや動作化は、小学校と特別支援学校に共通して教科書指導書に例示されていることから、有効な学習上の手立てであることが示された。

4 考察

(1) 小学部段階における国語科の順序性・系統性

- ・「読むこと(文学的文章)」の指導にあたっては、題材中の語彙に注目することや経験と結び付けることが重要
- (例)「読み聞かせ」の中で、挿絵と音声や文字を対応させる学習を先行して行う

絵本等題材を基にした動作化や劇遊びに取組み、絵本の世界観を疑似的に体験できるようにする

(2) 検討課題 ー挿絵から文章の読解に向けて

- ・小学校国語科「読むこと」においては、文章を根拠として内容を理解したり想像したりすることが示されていることから、小学部段階から文字や文章を系統的に学習していく指導計画について検討が必要



学びの連続性の実現に向けた知的障害教科の検討(中学部)

ー国語科「書くこと」の“順序や内容のまとまりを整理して発信すること”

をねらいとした指導計画と取組による検討ー

金沢大学附属特別支援学校 教諭 高橋 尚也



1 目的

知的障害のある生徒が、順序や内容のまとまりを意識して文章を書くことができるような指導法について成果と課題を整理し、小学校等との連続性をより推進していくにあたっての指導上の工夫と留意点を明らかにする。

2 方法

2-1. 対象について

期間	2023年11月～12月(計13回)
場面	国語科「作業製品の作り方を説明しよう」
記録	授業メモ、動画像、成果物

〈学習活動〉

読む

～説明の工夫をさがそう～

書く

～書いて、話して伝えよう～

複合単位

2-2. 取り上げた授業について

〈単元目標〉

- ・共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解することができる【知識及び技能】
- ・自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えることができる【思考力、判断力、表現力等】
- ・言葉が持つよさに気付くとともに、楽しんで読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする【学びに向かう力、人間性等】



【作業工程の説明を書く】



【相互に評価する】

【生徒が見つけた説明書の工夫】

相手にわかりやすく伝えるための説明の工夫① ①②など番号があるとわかりやすい 順番を整理する やったこと順・したこと順	相手にわかりやすく伝えるための説明の工夫② 目で見てわかるもの があるとわかりやすい 写真やイラストをつかう	相手にわかりやすく伝えるための説明の工夫③ 数字や場所が書かれているとわかりやすい 数字をつかう 場所をつかう ・「3こ入れます」 ・「5cm 切ります」 ・「線のうしろに入れます」 ・「右におきます」
---	--	---

3 結果

生徒の学びの困難さ

3-1. 成果

複数の要素を同時に思考することが難しい

◎ 学習活動を分けて焦点化を図る



【工程の順番を考える活動】



【想起して書く活動】

生徒の学びの困難さ

文章の前後のつながりをうまく伝えることが難しい

◎ 「番号表記」を「順序を表す接続詞」に書き換える

最初に カップのふたを開けます。	② お湯を熱せるところまで そそいで3分待ちます。	③ 湯切りをして、 ソースを入れたら完成です。
次に お湯を熱せるところまで そそいで3分待ちます。		
最後に 湯切りをして、 ソースを入れたら完成です。		

③ ↓ 「最後に」

② ↓ 「次に」

① ↓ 「最初に」

3-2. 課題 学習活動を焦点化し、スモールステップで指導する

参考とした単元よりも、文章構成にかかる授業時数が多くなった

「構成の検討」の学習過程

「内容の順序を考える」
「内容のまとまりで整理する」

①「内容の順序を考える」

②「内容のまとまりで整理する」

4 考察

(1) 国語科指導計画や指導の展開

- ・「読む」「書く」という言語活動を、テーマ性をもった単元で組み合わせることで、より効果的な指導ができる。
- ・想定される生徒の学びの困難さに応じて指導計画や指導の展開を工夫することで、小学校等との連続性を確保することが可能であると考えられるが、小学校等よりも単元の時数が増える可能性があることに留意する。

(2) 書く教材の選定

- ・生徒が意欲的に取り組めるように日常生活(学校生活)に関連した教材を選ぶとともに、その教材が持つ情報量についても検討すべきであることに留意する。



学びの連続性の実現に向けた知的障害教科の検討（高等部）

－高等部における「話すこと・聞くこと（話し合うこと）」の指導・支援の実際より－



金沢大学
KANAZAWA UNIVERSITY

金沢大学附属特別支援学校 教諭 加賀 詩織

1 目的

本校高等部で重視している「互いに納得・合意を図ること」を踏まえ、国語科「話すこと・聞くこと（話し合うこと）」に焦点をあて、本校高等部の単元と、参考とした単元の学習指導書を比較・検討し、小学校等との学習指導要領の目標・内容の一本化に向けた可能性の一端を明らかにする。

2 方法

- ①対象 高等部1段階の生徒で編成のグループ（1～3年）7名
- ②単元 小3・4年の内容に替えて取り扱った2023年9月
「話し合いをしよう～学習発表会の目標を決めよう～」（金沢大学附属特別支援学校,2024）
- ③方法 本単元の参考とした小3「はんで意見をまとめよう」（光村図書出版,2020）と比較・整理し、分析する。

3 結果

	本単元	参考単元（指導書より）
(1)指導事項	小学校第3学年及び第4学年〔思考力、判断力、表現力等〕A(1)オ 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	
(2)授業時数	3時間	8時間
(3)話し合いのテーマ	学習発表会の目標（生徒の生活や学習の広がり・生活年齢に応じた話し合いとなるよう考慮）	学校や学級の 実態に即した 話題の選定を勧める。
(4)話し合いの進め方の手順	①目的を知る ②自分の考えをもつ ③発表する ④意見を分類する ⑤意見をしぼる（質問もする） ⑥意見をまとめる	①考えを出し合う話し合い ②考えをまとめる話し合い 学級の 実態に応じて さらに段階を分けることも示す。
(5)意見が割れた際の話し合いの進め方	例を示して説明 	示されていない。
(6)教材①話し合いの進め方	紙面で提示 	実態に応じて 、司会をする児童に進行表をもたせてもよいと示す。
(7)教材②考えをまとめる	付箋に記す。 	・自分の考えをノートに記し、付箋にはノートに書いた内容を簡潔にまとめるような使い分けを示す。 ・音声資料では付箋の意見を記録係が整理
(8)学習評価	行動の観察（発言・付箋を動かす動作） ・「概ね満足できる」状況5名/7名 ・「十分満足できる」状況2名/7名	観察（時間ごとに重点を決めて観察する。また、録音・録画機器の活用や振り返り場面での自己評価・他者評価も活かすよう示す。）

4 考察

- ・(8)より、本単元で生徒が「満足できる」状況を実現→「話すこと・聞くこと」においては一本化できる可能性がある。
- ・(3)より、「互いに納得・合意を図ること」を重視し、教育内容・方法を選択→学校生活の充実・発展と卒業後のより豊かな生活への連続という視点を踏まえて教育内容を組織する必要性
- ・小学校等において「実態に応じた・即した」とされている点を、生活年齢や知的障害による困難さを踏まえて具体化する必要がある。本単元では、知的障害による困難さの状態を予め想定し、手立てを講じた指導を展開→「満足できる」状況につながった。